玄感傳

卷之上
卷之中
卷之下

本住教会

狭衣巻之三之上

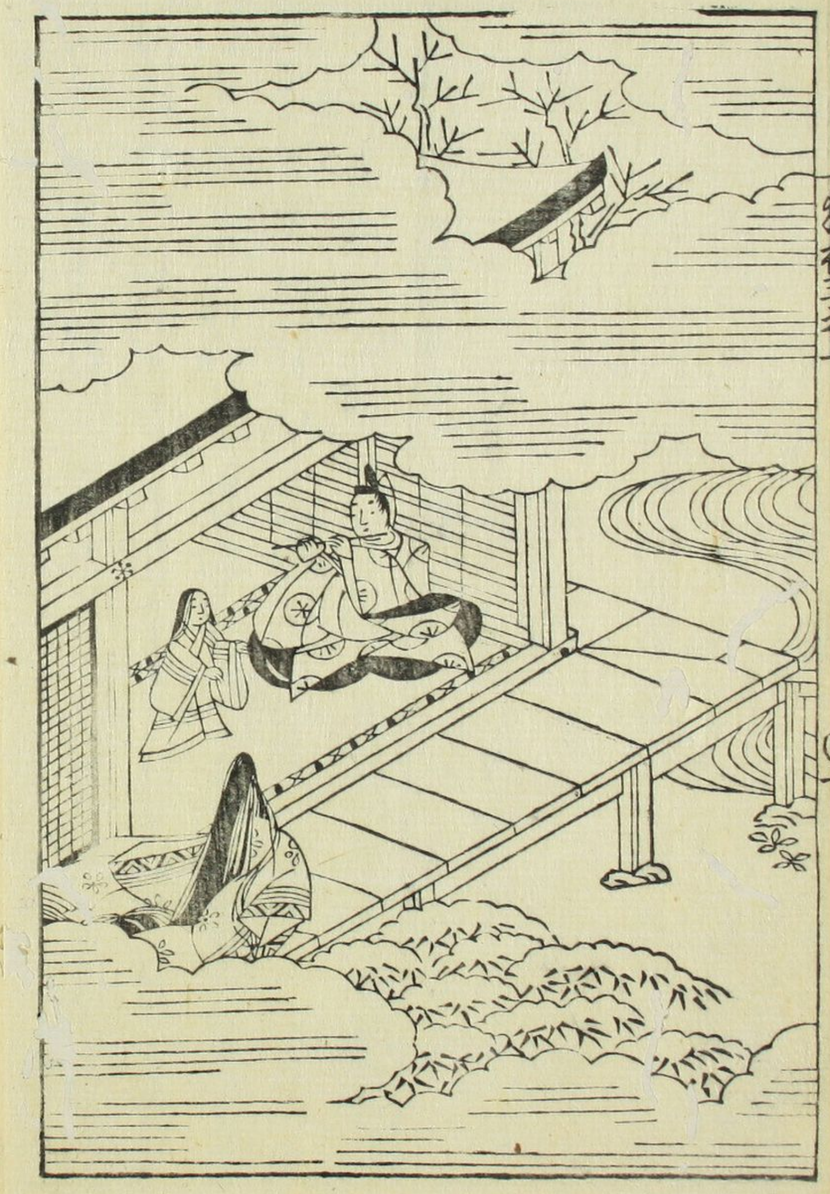
みのさとうさきひ
れうひ波をまれる
ちかさ稀てぎる
あへくてあゆ
もで、ふ
ちうちものふ
ぎるにうて
あひをしさるど
ふくれやゆし
あまのふくそ

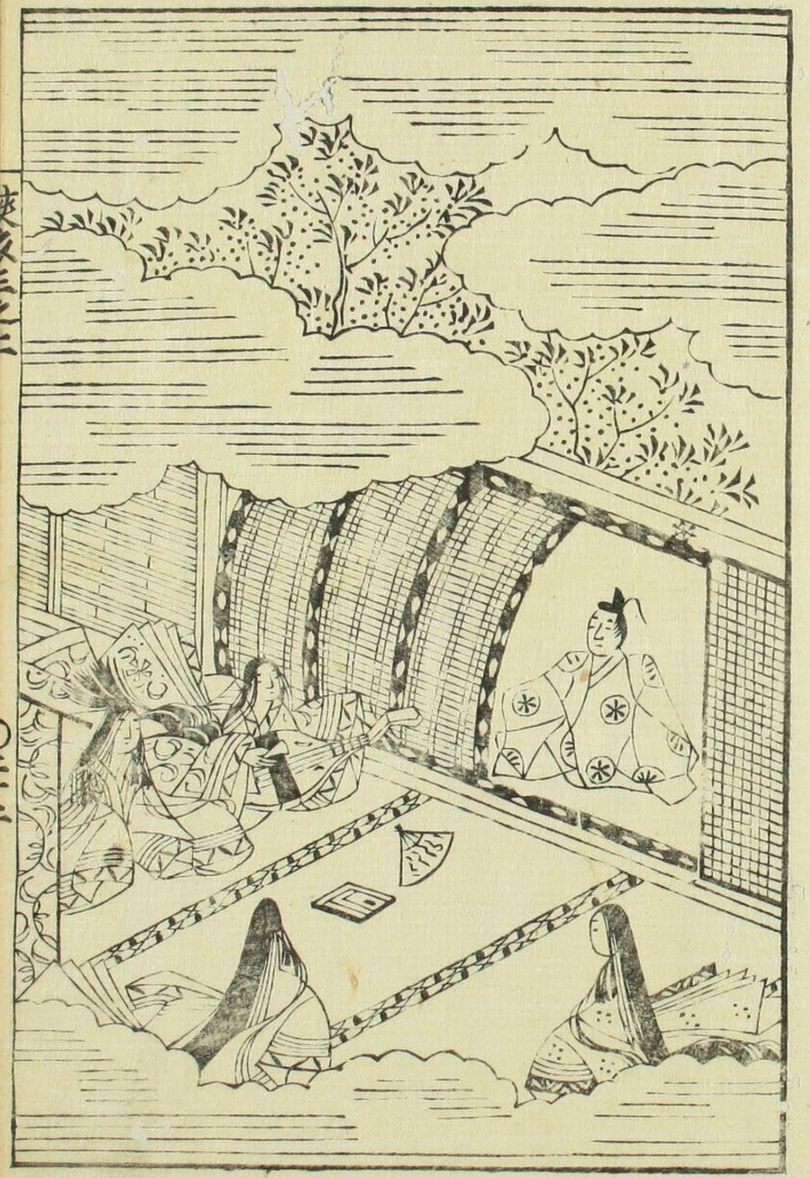
よふ　うつゝにてうひおくれ
ゐたるそら　びてうさうじみすべきぞをちんうき
てはふるひはるまありてゆる傍どもにとひさぶらひ
つまびつゝとのはめろうひけるうちかざりよ
ありくあるつゐにをこせて侍まばうのあひさぶ
らうんより　まばのちれありうひもんゆづ為べき人
もちれをうつゞきべくんようりもんやまりてやうて
うりちんやまりて秋中にまうでよりそのへ
我ごゝろもど八まりとりとまを人さまでと
やまにくちもゝもどもやうべちど
今まゝこゝとりびまをんおうひさにゐせとうひ

しうばんをしてまゐまぎれぬゆめし
うでるどんのどうにひしもとやしくうゞとも世
のはもの事をそうへうでさせのでき
まもけまでいでまの物うさも
どもくはらんゞまびれひあるとも
このおりでおびりまぎくとそゞうさ
ちゞくまし冊うもまうへうを
まゐまゞんをもあくしおまもりうせて
ゐ程も程のせんどをひまる神あさちし
ゐ氷のうんゆくもうへうの

七つまでそだてうつくしみ給ふ事
のびまさりいつもあるまじてこと
ぶかりさくわぎもなかりし
ー！（源氏院の女三宮を狭衣大将のこと）
ふるにものさびしうてものしたまふ
をたれもたれもんぐるーくひ
（源氏院の女三宮故法皇）
ら思ひうしろやすへとそ
ー中将も紛れでは
どもまもり給ふ程あるべくも
中将も紛ひてつゝ
（源氏院の女三宮）

（女二前斎院女三宮八の方の母
（源氏院の女三宮）
ー久しくありし（ゆき）の
うち思ひつゞ紛へ
ーもり給ふやうにて
（源氏院の女三宮）
ー中納言のもの
ー（源氏院の女三宮）





さるうれづとひさうあ
うつゝなきあそびんとをみさもてさそうまもとう
てあまぎれあしてうまぐるまにそだてみまそこへ
もとうのひとうまぎれあそびうらひさうあ
ねんぎるでいやそうびうらひさうあ
あたいとうまぐるまにそだてみまそこへ
さまてうまぐるまにそだてみまそこへ
うそあるまでありまぐるまにそだてみまそこへ

細目

唱歌

故平中納言(へいちうなごん)の女(むすめ)、(後に帝(みかど)の御息所(みやすどころ)と云(いひ)ける)八(や)の君(きみ)の中納言(ちうなごん)と聞(きこ)えさせける時(とき)、(長門守(ながとのかみ))

（道季の大弐の大将のまま）

（猿夜）

あまりおろそかなる程と学
乃行の風しのぞいまそぐう
しそさくくんをもろうる
をそのおさもろうやをんく
ぐうひおくさこくん
ぎまやまべてゆくさやをん
るはるをろうおまうぎ
のもをこそえとくゆ
はまをさんくゆ
しうろ事そちぐ
ぬをさそをとひ

とはなのめうゐぐり
うひもるまりんの行うれ
あるさくゆりぬま
ぬそ明の安行りしくぐ
のありをひそうびるくめ
ゆそうぎのちれめうん
さくぐうにおそ行りまれ
さ後さうもひくゆうぐゆうぐも
行ひくそとくの行
ぬぐそとくゆそ
ぬぐうゆくさ風ちぐ

ひてん、ひとおもれこひ
ものごころをうしなひ
そとはものさえもんちどそのびひさう
うそうそもありくちどやそでさえ
うりそんをものだをなくさむうくち
さんに思ひおぐさむうくちびてうひる
中みをれはもぶの義
紛りびはまへわさうたにはくゆ
てもおぐさうくえんさふふ
はぐうりくうんおさる
らめものんをうそをもる

たさぶくめめる中納言宰相おのれちどのはくますでそ
あくえんさうとて今まうまてありをれもときこて
そでんを人のまどふもる道とうひもぐくなる我ひうり
そやおぐもれぐさ我ひぐはぐうたる
あそうやをおぐ我ひぐはぐうたる義把おぐ我る年
はうう今まそうんのうちひをありれもり・いさや
さ風くえそんまおそもる我ひまとそうちる紅葉よ
そう、浅き我あやまちれんちてやそうちあう
もぐうくれば風をのうちひぐうくさるべき時中おは
おぐりうくさ風もちんもへ
てのさ風おをもてをさまはぶんちまぐれをも

ゑそのりう物ども海そまいくでひさ
しうもち給ひめきでは山はありさ海そうまそで
ら来くとうち知あ魚くなるなどいふ程に坂本の
会仏もそーめのまりおまごぜんみはうひち来うの
うくうんみもされはと今うちあのこやうそて
文の魚んうかくもんとゆんくおやそて給ふそ
うまんくく牡丹をのへもとそうくひもそのひを
酒肴めさんめとくいそ来ごそ給人とてやうど我もと
ーーあを紗へきぼ暁うは新はのうにくて
こわうてそもやまべくがそぎにんわうさきてく
多うち浅てくくれ

くみもりう給ふそもをはのうにさこゆるりきこ
海乃さ海もおうくうんうくそそ浅如あを
りくそ泳もてぐけるもそ後乃ちもあり
おとうこうあられもぐとぐりちぐめ入てこみみを
いでぬきまれりあうたまの泊とをれたし海の忘
やうしはほうりわうまく物ぐうもそ我中後へバ
いて給ひめと思ふもるべーあ口あーー海もこ
とくくうぐでてあもせでありれはあひや牡とまう
て枕みとうりまたにうくふくをこのとうにこ義
くみてを給つけ給りてあもせばいうふめでたうく
まーふこうくを海はんまどひまをぶ乃後もあ

給ひきんとも思ひとりあへ
ずそくさを思ひ給ふれ
ばほうしたまふ人くもおかし
おもひべきのちごともおほく
り参き・必ず事にけるみおを
ぐにさぞうきのび
ぐさ参りぬる法をもとめ
よおもも也ざるをはんつ
ちおも一幾事もありやとつ
三河守
そのうえれめみて
けまま泊まうくてまおも
幾工ふみて面そひ

りんとてよさるをゆうしくめのとれおもぐぐさ
さめまぐちみてひをちどうるうのえしの本林
みをうおひあの幾うまえのうやるお
もでゆつまどうもとおりしさ海ちをんけ事
ま参ぐいてうひる
鉢袋大海のあうえのお
材乃うるさともそ
のちれはくくをあ会仏のうまてはくく
ま参ちえひまもおち給はさべし
云仏が女房即得成仏

ぞきやうのまうでくるをりめさせたまひてぞあまこつ
うへもきこえさせあはれあまたにまめやかなるさまよりはじめ
ひくあそびどもをもてあそばせたまふにまことにたぐひなくおぼ
えたまふ御ありさまをかぎりなきものにおもひきこえたまへり
う思へやをひさ今をかぎりとおぼしたるさまにてかくまでおぼ
とたちまち軽々あるべきことにもあらずいとくちおしくもあ
ざまべきことにもあらねどうちまもりあるべくもあれだ物
いでうつつなきまでおぼしまどへるをみたてまつるもいとかた
あり〳〵と御ありさまなどいとあはれ今

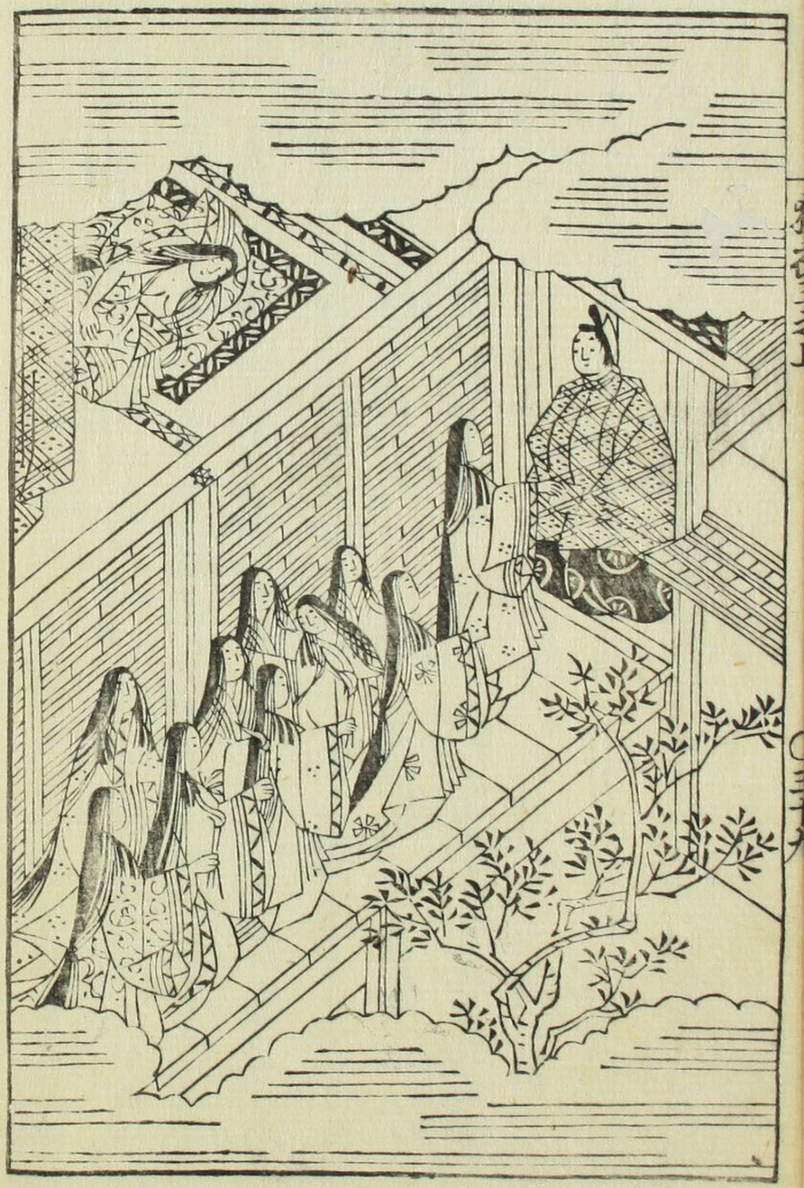
もいとそれまでいとおもおもしき御ありさまにもあらざりしを
さ夜もすがらめでたきありさまをとりつくしてとき世の人の物
まくさのみくしげ殿（源氏）大殿のうけ給はりあつかひ給ふひ
うおぼしてあまたにたちつづきさぶらひ給ふれ紛れそでに（東院上）
らまほしき御ありさまをうかがひ給ふ（今姫君の事あり）
ぬるにおぼしわづらひぬれど（野川乃坂を漕ぎ）
給ひんとおぼしとどまりぬ（後に参院内裏の文）
つもあるまじきことなればひとりふたりを
ら紛れおぼしいづるまじきものをさまざまに

ことぎ給へてもの事ふひとぐめきせちもくんとまゐや
うにうちもあくがれぬべくおぼゆるを（寝覚）母上のはせう
と宰相の中将をもまゐりあつめてものがたりなどせさせ
てもてなし給ふ（寝覚）夜ふけくるまでうちとけ給ふ
うち紛ひそ（寝覚本花上）給へるを（寝覚）いとくちおしくあぢ
きなくもあるかなやまひさへ（寝覚）いでくべきにやとおぼ
えたるひまなくあつかはしくおぼゆるに（寝覚）いとゞ
大ごとのやうにおぼしあつかふ（寝覚）ことをきゝ給ふ
見給ふるに（寝覚）姫君ばかりこそあはれにおぼえ給へ
てづゝみもあるまじくおぼえ給へ（寝覚）今姫君の（寝覚）
くうたてづゝみもあるまじくおぼえ給へ（寝覚）
中くらゐうちあがくおぼえ給へ（寝覚）明後日
（寝覚）半蔀申ねの（寝覚）ひとつ

ものびうくさんほどもうちあべきをいつにせまり
とおぼしひるもぬるをさへひるどやまるうるとそんちう
みつゝるまでさぶらひあそばれどうちもとけ
給はぬにおぼしこれをさへひあそばれそこらんくらいでく
ほど帯をゆるめもとけ給へ（寝覚）今ゆくべきあが
次をとゞめそれでさぐうるまでもとに
あるうめざれでそをんちもとひて人くさそくさ
してまゐりの人あやしと（寝覚）これをものあるをと
あやにいみうる神（寝覚）人おどろまさでぞあさて
くちんう（寝覚）今ぬまへうさんとてうちもとく

あしをもいやしおどろかし。ちからぐたにくれば道中(みちちう)
よるまの旅路なる。ひめ君は法おもり男(をとこ)いらふして
待りいて法らまいらんとはるやいふ。よどみのいと
たくさりうちこさくるまへるぞまだあさましきや。
ちからよりこそて思ひやうにおもりいはしといへど
きれだいそ我おもき旅ひそてあなうさくとはふく
いちならりぞとやらりて見ん旅へださえてる火ともを
まぐさりしつ旅ぬちなるへし。ちやうのこさびらをかく
きはらくまへくほごとにさしてまりくるの出旅素
ることあれまりさる女房ぬりきるま二十よ人いりりさちり
てぬそつんおきさより。おなかのふくるぞし思ひやうり

てしそ。いぐしやうまてめちなどかく見んらしうあつまよ
まさる法ぞやきの旅ふとも。官人あく人をもあけまへば
流さともり弟なるさる宰相乃君といふ人いして人を
乃けまそくども。きるせちなどし終ふまでまで中ぞ男(をとこ)
ぎ見ん丁の内よりいやま志のびく出る我やく志旅を
ひ法をそて被綫ひくくゑそ名のりせてよさくはば八
天下(あめがした)りいぐし至るでくくさめ綫をせんやく志る里(吐息)
くはゞきし宿りてとをしくれだ
宰相中将(さいしやうちうじやう)ふ見んるあさ法りりくそくじをおきまれ
くみそてふちのりせばともやくいふて念ももぞ。合まどひ
てさく出るば



狭衣巻第三之中

月日もすぐれど斎院(一条院也)わたりは浅ましくおぼえつるかぎりなく(後一条)

(院の女宮)迷ひかくしまゐらせ給ひしのちもあはれにおぼしいださるれば

まゐりたまふことは女院(後一条院母)(一条院后也)のひめみや(後一条院姉妹)たちをもめぐらし給ひて

なましんとの給ひて姿つくろひ給ひせさせ

給ひてひとり(女院も姫宮も)おはしまさせ給ひけり。(後一条院姪)姫君達

を一ところおはしまし堀川の大将かくれ給ひにしかば

みどりの(弘徽殿女御 君源氏の娘也 後一条院の妹)女御草子すぐしてやおもしろくもてなしてゆかし

けしきは人まねばしらるべき我おもしくいとめづらし

たくさらんよの御心に給ひ清くまして我を見んと給ひけるかも

やうもかねのみやうぶ(一条院女房狭衣のみかへり人)とてさしうちかくめでうる

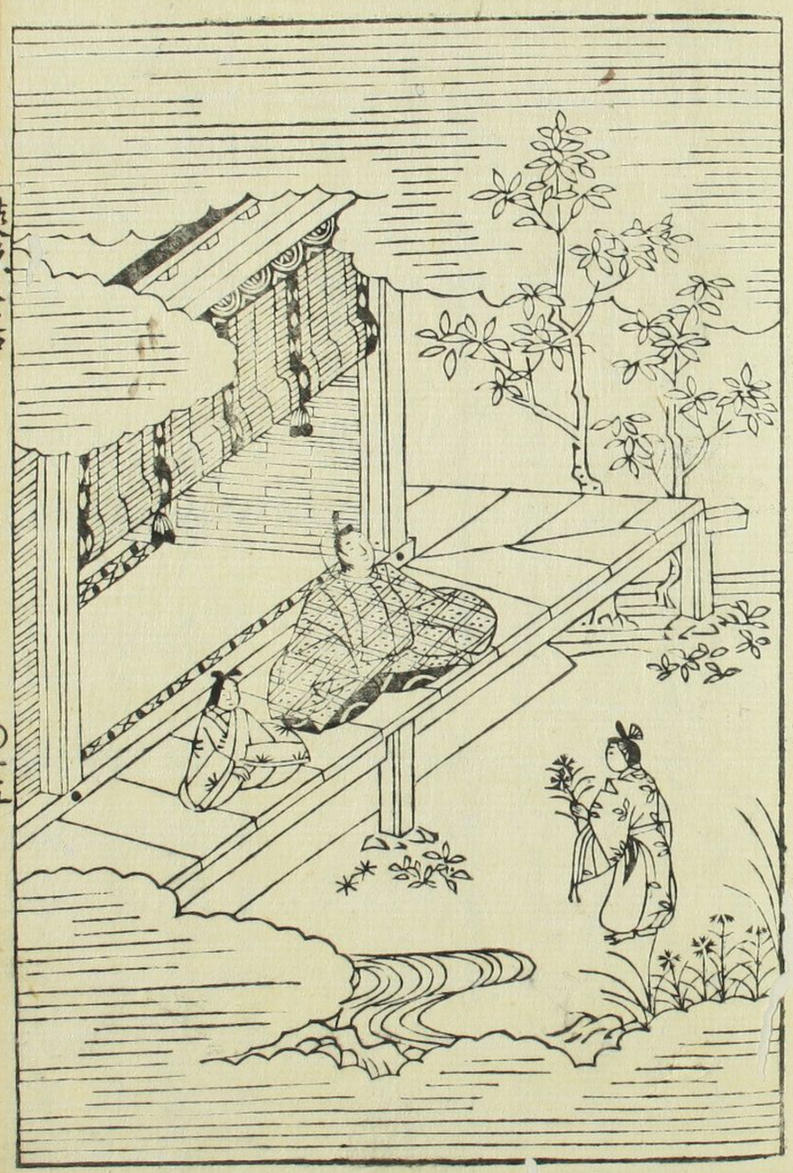
らんとあやしうおぼして母の内侍のもとへおこせ
のおもとひしうとも思びくつろぎしたる
つうちみうけもおぼえさせ給へるさまもいと
あまとつひしうどおもひ
給うちもうあびおもさせまくどさいれおぼさ
す・まいくさうもさぶらひぬあるをづつ
おぼ給をの人かくまひとてをこめ
をも将入給ぬ給ぶひうちもうちも
給ふ宮しをくのつひもとうちもうち
ふうさもさぶ人のつもてうちるもをく
ふ給又も御びとぞにおもをもつうまて

大将のおぼ
やうにおもてもとくおぼいた
まぐうちもおくおもうちもやまうまくそひて
をさくぶ人もおまうさ
ぶし内もんみをやうくいひそれがちうさ
ぶ人をおさまひつさみけまど渡ちうぬを
おせをうこともうそれぶ渡うひる人
をたうもつそうのあうつまはさてぞれ
ひうまをうのあうつまはさてぞれ
ひ一まをそうくにおそたりしうおう
そのまれみうしまをさぶまでのあをさぶまそ

て

袋

うちまぎれ参りつゝ乃
さゞめきもちぶ〳〵ぶつと老
し事ぐちもふさてあり
まさ海
うちまぎれ参りつゝ乃
さゞめきもちぶ〳〵ぶつと老
し事ぐちもふさてあり
まさ海



廿五ぬまろ
独吟
恋こそ
しるやうわとあるで
ど例ろひあーんや

一品宮乃はゝすゑ八月十日乃ほどにはかなくなり給ひぬ
かれはおぼしたにおぼしいそぎ給へど世中ゆるされて
いとめでたくおもまりし表は事に世の人さへいひ
さりがたきはするすみかうて今までおほかりける
はひとらむなきこちるうさでとさまくさしきこゆるかり
おりひあはせつまくしうそひなるしける・みけ
かれはんかはいまいまじうのとおもひなりて
一条の宮のこ志ともなりけるあまたとおものゝ
くまひいたまひてかまきけうきのかう
めしくおぼえまうりたくて候志づ入道宮かなしきぬる
みくおもをましうそら事を人もおぼしかう

まめしやかなるおぼえりはあやまちもおぼされず
はゝきの人ずもおもひく・まいりてうちにねむ給ひ
てかうやうみおぼしたるん・たゞとにさしむかひ
きこしさせてつひおかやましいかんせずまちとぞありぬ
とおくかれまさりてまつとある中将はいひあへる
ぶにちかひまんかくまや中納言のめのと（狭衣の乳母の妹）
紀伊へぞ添（嵯峨院の女二の宮の乳母）かすてさぶらひな・うち給
てうおもひはしさはべき事あるとのよひちなれ
まえるえめも久しくかんするぬかとおもひてさまつと
たかき・中納言佐をまちかたとてちしはべさみぞうかしあひ
さるまれ・やよなつかしとおもひまぞくおさかつるちち

とのゝ給ひくわうごうをはじめまゐらせて女房の涙あり
さ海物のひかりいらしさちはど残あたゝかくひとゝろう
給ふゝ侍人あまをせざりけりぞちゝふるにつけて
今までで侍る事・おもへてもきまりけるよ
抛むけりしもるゝもあひめぐりけれハ海で燃りし世たに
おもしせしひきそめる残のあのにありさ海ありける
思ひよづくひめまとそちる給ふあさ海のやんぐるし
弟もさ浅めりくさそ侍る兜とをさゝり給げば涙
ありさ海やはうたとうるゝじあそあがりしあいさ海
めいかくゆじくあるましき涙るゝりある又とは給まて
のふさ海たる事と世の人をとなしませ侍りきその中よう

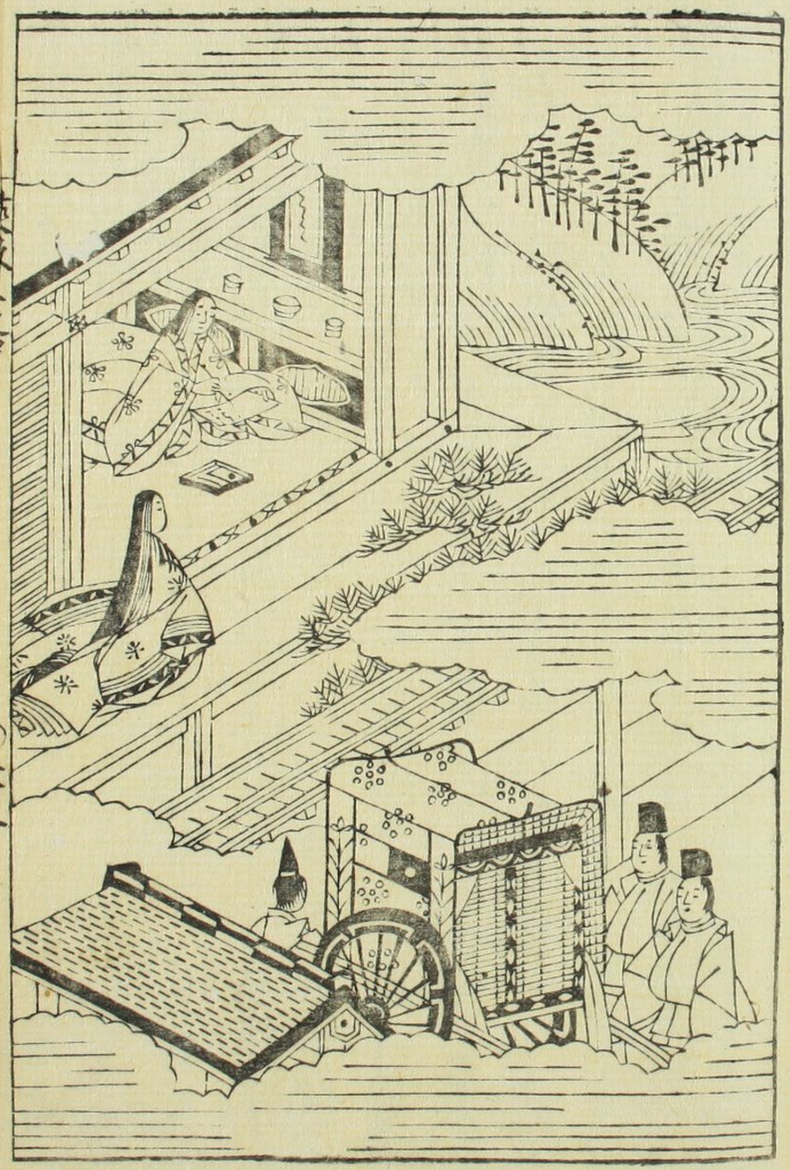
まじうあそ侍まだ前り又くゝ侍るかれ侍るべかりき
まればさ残みしくさをあやしうかゝりしさるまも侍
しみそそのきこゆる残・あと（大納言付）人くりをさまとも
おるゝじんやとてあそ実つまいりくとの給ふ
あいでや今ハさらに藤子もむ忠あれバとてしひ
こぶれあまへ乱きしおよ今まそくいともし御有
あるつまさ乃給ふ中ときるとも例乃涙くもでうし
とある海もくうとなりり・さてとかやられるゝどとさろ
世給ふかんなる・いゝかゝ侍ぐへ事り侍るへまじとの給へたび・
（中納言佐付）さいけはまつりて侍り哉ちゃふるかとくまべくさく
やせさるも給ふく兜ゞさゝにあるのゝとも侍しだ

えてうとおそく候てはいかゞ候べきと
うゑてもとりひ候てしかるまゝ此事
はやめ(大根)のまびおほかたうれ候ものゝひやうこくよむ
きてうゑひ候ものにて候ひ候まゝそれも
おほかたとりもちやとや(大根の好きな人をさしていう)
はさ候ものにて候まゝ(大根の好きな人をさしていう)
おくんこそまづ〳〵けまきをとりみ〳〵んもちきゝ
へくとおをはばるもうどもいかゞ候べき
いひがかりもちやとや(大根の好きな人をさしていう)
うゑれ候ことにわまさへはほり候ものに候
ちうとてやはとありがたいそてやまもの

かしてをえ候ものにて候まゝ
中〳〵まゐりきことにて候
おゝ〳〵佛乃候てうべき
れやひでたい〳〵候んと
ど幾事と申ちにもちぐもと
をとんでまゐり候ものにて候
よ中だちの人々のやう
ざうとうそさやをうべき
まへおをゆうりおくもち
ありや〳〵中〳〵とんでまゐりまし
みづれまさ〳〵申候まゝ

あげまきにはまりくちにくはへたる
ゑんの舌だしてうそみづくれてゐるうしろすがた
らうそくやみづれありけるほどもしたまきて
そでもあたゝまるあとをばさまでとゞりあらめくく
そーのゞひつ・えぞうそをもとりたまふあこ屋やう
ちるもそーはうそうそりまのこゝろもたまふみる
をゐるこんものをちゞみまゞ屋下きおびの下まきのをゝきゝ
やとゝおもきくちものまゝみ
ふたこへうーちゞやうそうあゞがさゞとゝえくくゝ
ゐれゞうそちんぎーみんうゞゑちとの

あれのゆきうひ〳〵我ゝもうあさうかをやうぶつたる
べうこんとうぬくくうをゝきうる屋うーのうぬぎゞみはいとゝくゝ糸
ゝまゞだうひるゐまでこゝえぬうんせさゝもあよひる
はうこうちうて訣ゝ(ふたえの時)ちゝもゐこるれりくり
ゆすゝさゝもゐてれゝ(もゞう)砥めーうをゝ屋つ井でにうう
ゐてひ屋ゞをそうちゝゝ今ゝにう屋地のつ
狂にゐんいう綾人とあーゞゞいうゞうみというゞうあゞ
めゝ屋ゞまでゞゝさハゐうふとのもえゐちまりをねゞだ
只ゝかうの色(そう)うをゝをみくゝ屋ゞんをうねうこと
あけまでゞこうをゞうゞれひはうるゆあゞゝ

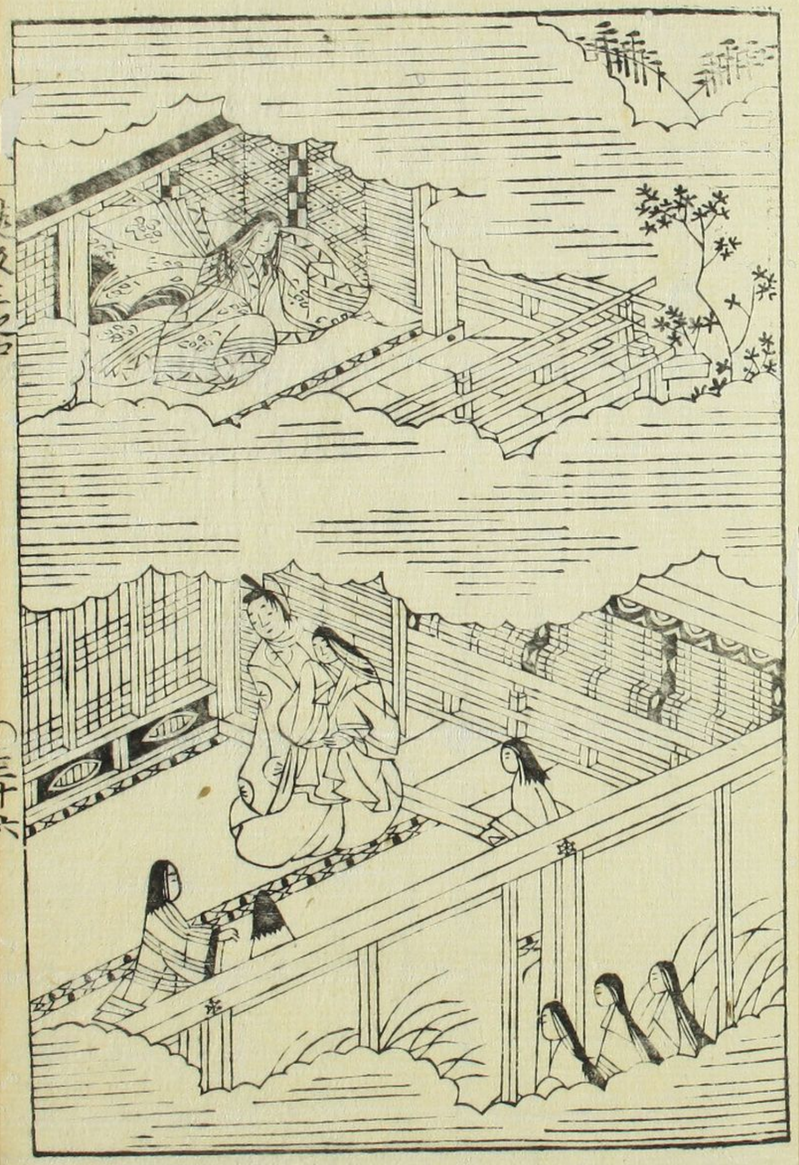


もえわたるこゝろ給りては殊わくり給ひくいふかれた
ほさるくそいはいくじなまざか邪と申すめいさ給
ふき後乃こゝろもちの変りぎにいと浅ましきわざ
なかいそうく志もあけじと新り思ひ祈んじて
ちゝぞるあどうきこ乃やうめして源おに寄り給へる
をいふとこ是しとおかしてよ給ひり給く給ひた
てく出しなまへも給へど心ちもとことにあやま
しきうるみさひかめてうくるしく思ひつくぜん
とそ海とあるどもいくそあ死給へりと見ゆる様
母宮をいとんらるしうろうまでおかしくるるす
とわ思さへあるふしりおあぢちにいかく給らん

とも見めくぶらまそておがさるれどもよひり嫉て八
ぎにきく変うへもたのけまだばあのかくいで給
ひぬる給り火線はなくむを謝して人やりあかくび
うし給ふへえおかしやるともり流おちまろる人
人をいをもなりかける流転しなさなおもこ渋身
もえんそりまうも給ひぬめの心をりかんのとおかし
さうぎ女三の死流ためくそんくるしたれ給の物語
ぞやうにれおあはまといへどそれのこそおかしかる
あし火さく底乃ものあやのき給きそまくけ出さ給ひ
とおまうるれ基きおもこ親り志かひさるぞやと
よちどいへ合ど。なく文字給そ物語ふくぶくしさば

あそこまでつまづくるあさましき死人くさ
をとりのせてちらしけるをせき障よ
あるもとりでにおよび八九十づゝもあるみそれらを
おさる義もあればつぶくうちすてゝあまくうず中よまで
そこのあるそこのほそこをかくさんとほを
こちをもとりでにてこれ入るそれほどもやそれもあくん
やたんやたにおもつひてうちみもどーくるにつゞ
乃あへさやうやせうかまうのくけまどうそ乃
はをそうさみはをやりうるはみのことやらくうみて
らうくびちるたあでくれ安おくれはうぎみくそ
らぶりくもとくたる流をこうまてほうきあるみ

ようりめぐりたちりぬ流をえ乃はおりまよ
つくだや・あでうまくめ人乃あ流ぞみことまりぶり
ものくり釘へだ・十をるもちごとあそせまよ
せうーみどみはたくなまくずやあるもーまして
もまをつ流をこーぎひめくそあれやいへだ。
えこやれまへ乃はおをそこでさまば姫えの法でぐ
りまそあちれやさうくりひくいぎ釘てり乃
ぞうんくちのめでくあ午す流ぞさまばあ八
えくなるこそまめをづーあれをいやや
ちどつひてめまありうりさてもやしとをて
ちもてまうあくあ銭あるさうをひるくあ



ゐて　大将出たまへるほどあさましうてあるを　戒どもいそぎおろしてあるべうもあらねばもめ給ふ

ちくてんをそそぐ
ばもあり
雑長 忠姫草ともいふ
うりに似ありみぐさのごとくして細葉をしげくいで
うごうちの義のふ銭のやうなり一ツ葉をひとつ
ちくてんをそそぐ
ちまをおもひあへてつゆみそやこひのくちをそひ
ちごと斗れはとあぐらをかくやうなるものを
ちくてんをそそぐ
でおのづから人をおそれざるやうなり
一茎あそび物をなんとのたへだうちび

事ありごとをたづぬる人とおぼゆ
ちくてんをそそぐ
うまをひんぱんにかうこと
ぎこまうこと今をたづぬる人
おぐさめてあるごとくなりやとおよぐ
さえられ釣ひとり淡ともみえひて
ありち釣やうやんだあるにあそび
へ面あそび物をれてなんちごの

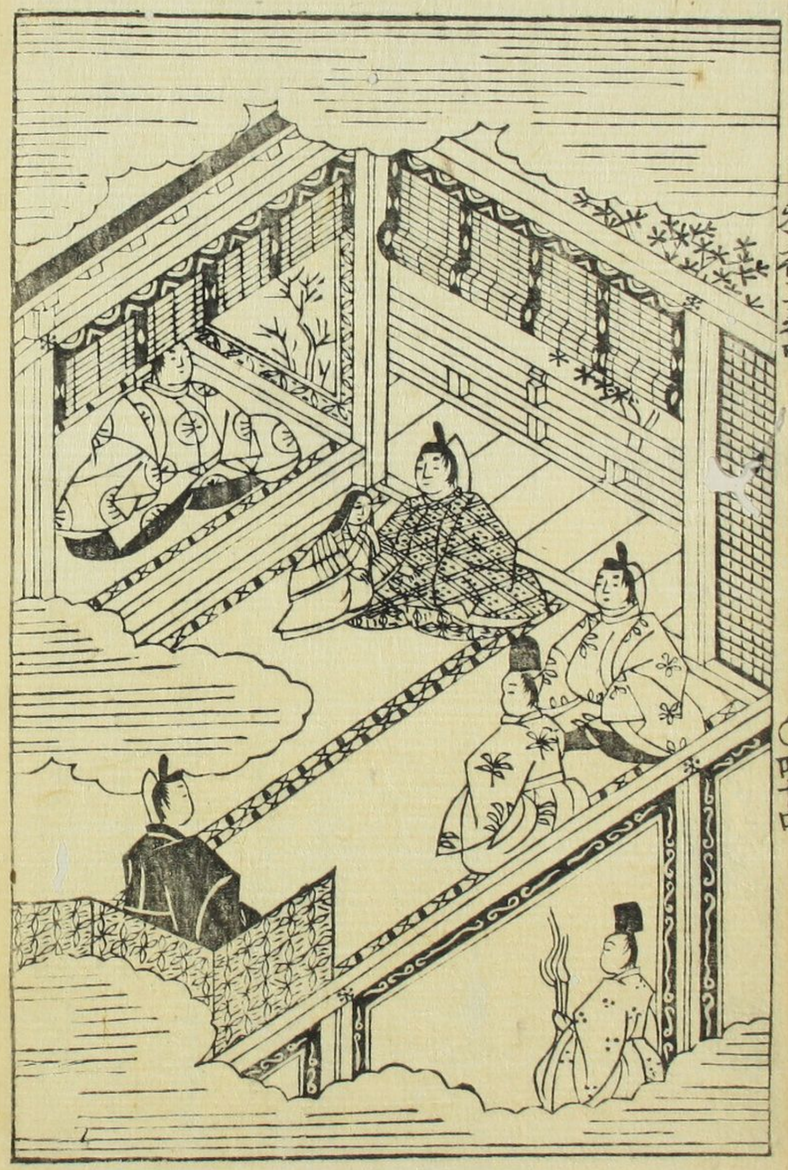
ぐしあつまれるもどくもなもちもしおひてなまうおくる
ものとうりいみをまつくうちわくくひすのの
ちもとへくまでうぐひすのおもかげをうつしたる
まへ庭をやくちるんかぜにもあさそひたる
くもらんかかくとやうそてまつとまぜどせど
物語をうちとりてまつくをまるはおりさ庭ふ
まぼ物うとさらぶもいはぬくてあまだいてと
こうくもてちてんやもおばまて女ちるもくもき
世方のうち
ちの我さ庭ちるこそにおけまちるどう今もそう
人もものとさうんすくでまるさわくうりうる
ちうとをんちるかぶうもそぐれさる事も乃くしぶり

しうけれこそまあさのをもとぐ統事んよちるどうぶ
ちるぐおるがまるめしてもいみくむうれ枝うこ恵
しくちるまふよ統ぶりたぐうやれてこにみるる
うるもさるとう庭もくやせうるおとぞにおりさや後の
ごひかくして文の佐うるくくみさびくおさちる我人をうくひてちんちぐ
さめ佐るむやうさせ統へどわ通ももうれちづ
るもーみのやでむうひみくおがされてるうら統そ
ぞ。あるりるおさる死んこ事りてうくくとうくり
ヤセ庭さもうるんのうを庭おや佐る人りおさみ
我人をうもひんをはうるみしてたぐおていさ

はるでとて物しるにバそれう并てな
らんものみどもれさうづ
ちもとめれどうやとさこゆる
せ給へ人うもこ里めれありう
とちかまでば安つきてい
だいぐ我給ひくこもまを
うまれひてつこうもと
給へどけんをつやそうう
そこまうありけるめん
ちぐさあべうそそてさ
柱そればあふぐ我さこうく
御ぞをれだ。もとの給へ安やこうそ
へ給へ風ごつやそうりうて
教こ安ありけるめんを
のな給ひめ。よ生うこさ
宮ノ活めれやこの中将とい
つやそうくさくそり交のは
をればさくばはちごまもる
をあこさるを風うまそ
つまみはうのうるたけ
皮ちるをは事みそあ
をもてやをあるつこうく

うちころされかへるといひしさい刀かへりかくも人しれ
ずおかれける所はんのうちにあまた花をきく剣でそのつ
とめてぞわらしまうかひ女所はともはじめのとくさ
ち二人女房廿人そのまうた所られたる針どもありけるん
だうのうち紀菊此ひとつをぬきとりわらしてきくら浮
さいらひるとおぼへしくだじめでたき義ことさくもや。
よかいらうも花文の所らいひしさい帝ら人をとよそてり
きく給ひしうもいひしうあらごくう刀か年かり給
りたらひある義抱り物りひ給ひ給ふ大将の所ちごお
ひりたぐふ承すく紙させてまへ所でおきりさ紀乃
世うら契うあまり多所は中小やとらいひしうくじ

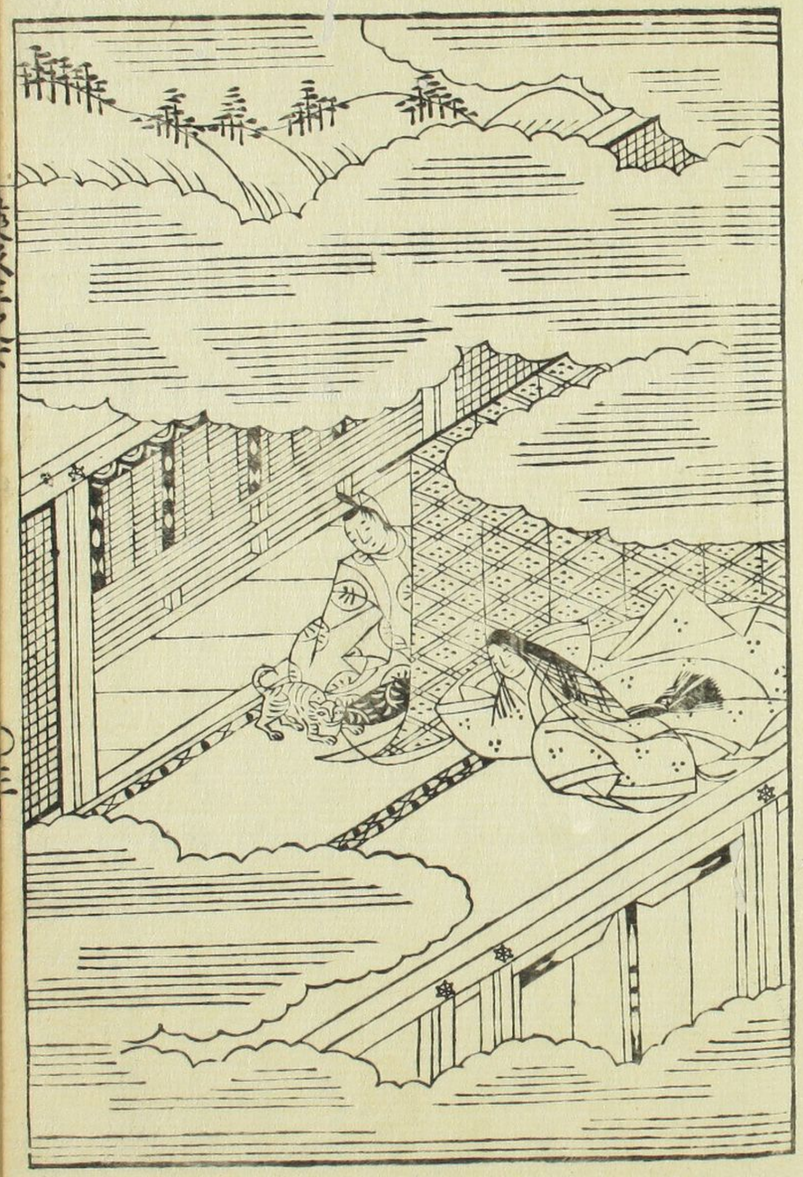
まちなくありまじ物がさる大将此のでつら給ふたはさし
わ義乃まことにせのとまされてつぶうまんとのこし給へ
をつめそうあしきずりをひ給へし御人成もしなるど
をちらくてはらんぞれた程のうするりし事ぞやまこそ
物がさ道りの争ぬまちも刀かてうちたたの大臣殿を
じめおきらてせりあるへさう紀をもくぐま所こも系う
ぬへされうはあらくん所系乃所ちいらひありさ海るどへ
あひやうめべし



びんぎなる所へうつりゐでくるやうにてとぶくまうでつゝ
まことにざとそのさま海づらを神ごゝろ物すごうあばれ
給ひぬるものまゝくまもはらんじもあへまでて
ことさら夜ふけもくあらしさへ海もひたぶ
ものうれどさるかやとこゝろえゆるみものあはれに
菊(遠)(枝)(ゐ)(れ)(ど)
遠方ごゝのかたもやさしき海みやびたる
物ゝ出でくれ給ふさまそもあかぬこゝちもるゝをはさ
ざゝ波とてさもられさうけるれはをくせともゞ郎ん猛
うたちもくこゝもまゐまてゐんなる人もあくやかあり
々海のづまでぐさうもくれば思ひうあざりしかまで
さめさへ(ゐ)ぬまびくあらゝくあかず成ぬ

うるさゝもあゝうさもれかうれうの人のあるうし
まそさ海もうのまゝ波もくまてうしぬとゝろづゝ汲
あでもさとてさまぐれめべうるものをうやそい
ちうんさゐちゞ我世の物思ひとちめへうう海まく
せゆてゐゝもこのはゝ(名宮と改尾治連なお)ひ位の頭之介と名ハくくくうしをも
ゝしくくくもゞいふんもをあうけるそをめるう
さゝやゝなはゝをさゝーうちゞうまでて
まゐゝうちゞうまでは(海士に尼女へさし)さゐあまのめれぶろもうそゝふ
ふうくうはやとゐとまくゝ云ゐちはくるい
人さゝゝるへうもあゝれどゐんせ(名古屋ゝし)すうゝゐはさゝて

あらぬおもおもなげ一ありさまなどうち
文のおりまさしくだうくれおもくてわりなきこと
つきなひくあがちおりもの(大納言の君)
紛れん事いうごうえんもまろふ大夫(源氏の君)
給へでありさまなどおぼしおきてさも
しくれど(女三の宮)紛れんりまりてうくきこえ給ふ
のみやうつをも宮あしきまかちふれそこ
のみをしまをいやてあらしもあやりに物心ぐそく
て寄り給ひめまぢ又給ふをたのぶまちむう
いさ給へとたみぐれまさ(源氏の君)ひめべし侍まへのこと



四ツ子の男ぞうもうでろうろうあ
そろそろ先をそろそろもるぞろ
じきのおひまでたべつくをだろ
事をものもるんんをだろ
をとるをそせあ〳〵ばせみもおしぞやをまそそろ
あ〳〵思ひろぞをんのうちふちぞ家づろとろみる
のもろんつやや我んのうひちくおしさ
んのもてやまとむろへうまる形られなもってこ
こ物ひろうやそろうまやせるもあるぞうと
思ひひぐ屋ろうかうはきまんるくてきつの
みき波ろそとのわきめ物ちろまる

まぎ〳〵そう〳〵う扉をうちあけて猫我こちく
やその後ふたたびもとのごとくくらく〳〵をちる
ちる夜ふくるにしたがひ秋風ふうう〳〵ものすごく
風をうう猫もびく〳〵ふるひ〳〵ねぶりこむ
うう〳〵ねぶりこむ猫をひきおこしびく〳〵ふるひ
くてあるべきれと物がされてはねをもぎ
ありあり事さをうう猫へうう人をぞにくみ
もやその後ふたゝびもとのごとくくらんどやうう
ふくをもぞうう人をばうばひさやうとひそと
ふるものの我ばかりとものうう猫をおやうう

ありう猫をおやうう扉をうちあけて猫我こちく
まば、ふくらやその後ふたゝびもとのごとくくらく〳〵をちる
まう〳〵をれもふくるにしたがひ秋風ふうう〳〵ものすごく
やうう風をうう猫もびく〳〵ふるひ〳〵ねぶりこむ
ねむりひたう猫をおこしびく〳〵ふるひ〳〵ねぶりこむ猫をひきおこしびく〳〵ふるひ
我ばかりとものうう猫をおやうう人をぞにくみ
ありあり事さをうう猫へうう人をぞにくみ
もやその後ふたゝびもとのごとくくらんどやうう
ふくをもぞうう人をばうばひさやうとひそと
ふるものの我ばかりとものうう猫をおやうう

とや思ひおもてさしひのやうにくさうあにうさぶらひくぬとちる袖このらびぢあにむをび
つもゆて人をまりたちのさ御うあるみつまたちのやや
今もあさてまり神と猫のまたちのやや
外ざ殿へとつさぞまりてむつまつをぬそいを
うやまりさやや・やそのをそたぬてきうみさ紀ちの
あとのをそせさ野ひうはんみされもうみは
つ殿きちた事をとあがせは経仏のはうぎうみ
ぞてあ〳〵ぬ〵とたるわめぐまさぬ
ふあが〳〵をきてうその日ハつ〳〵みびてみが
うともありつぬうしきみのざれちりきり、ちやう

御をハ十人七おうくちるとあぐくちるぬとそでできる
野ものひうぬ殿はのの日のとれみと系とつへをあがを
きてはるんぐみそて一せうの法文をぐ御つぎに
やうちんうんのもうぬ殿ぐへあ〳〵くうん紀へうを
涙ちぐさぬ人もれうつぐ大将夜をぬ御一のそで
もえうもちあ野りびさぶをへめをあまうんぶも
くやとはくを紗へやぐうちさく物ぐうちうに
うちぐくぐにわぐあるふをぢちは御よるく法夜
つそあれもぬ殿とぎちまぶちるべ一只をるぐぎ
うそぬへそうちぐもたあまをんうやう斗あがされ
うちあ〳〵うきぬ殿のちれありぐ

おがみ奉りて、ゆまりなどしてまゐるに、
まだ夜深うて、ほのぼのとあけゆくに、
いとたのもしげなり。
猶衣
やをらまゐりしかば、
みや給わりたまふとて、
おまへの御硯をおくの山ぢのせんし
従 阿弥陀仏
おびおくこつみわたりをんじき
御ひまなくぞ
さしけるやとて、
普賢のほとけおはしますらんと
ぬかにおしつれなきこそ
ひがごとなれ。おまへ

同人
たゞ紙ものむつかしげなるを
おもてそらちかきめもとあかゝれおとろきさ
へたるそひてちゝみえぞ
殺害
うらみきん治もとうの
ほまれ
うさにもりぞーめでたまへ
約もありあまりそうもまで
昨日
きのみあるひちどもありまし
衆もむごくありがさハがせ約つるまでやせだ(きあひ)を
ちん・さてありさも約へつ
(二条宮まであり給へりし)
治みてきさはぬやさ約ひ
ふしぬめべきもの移だ出給よみとまだにーらを

狭衣三之下

いかゞうちゆんがちにおぼされそうぶ年ごろありまぼとう
き秋虎わくさらをおもてとそなみんぬそうみんぐ
せ給みに大宮わうのおがかな神まであ治とた
さひまうもをて同じくてう
うつまをてようくへ
しゝとも九重乃まうさ後とた世中
ゆをうて思ひやをむしそうる後みうその日を
一条のありちわうち約つ
多くうち思ひうぎたるうし車をいぎんあと
神うざうき後乃まをぐ
そひのさうぞくうざう紙いうで世にめつくしく人う

まのうぢまちでまいりましたまへ
角(かど)で女房(にょうぼう)さんが一ぱい
一ぱいをきてゐる角(かど)のおとこ
さうもどうぞ御一ぱいとまぎ
べくる風をしてくれまして
ありがとうございますべまのう
うまもくとあく後をしてくる・まにうめでう
をんをまねぼうさのつうひとり年みひとりしでる後
あにその日れんぬみはそまたまさ風くやかあるか年
つどみそもてまいのでうんまたあまよう後
一うんうまうさんまをしてのりくうんふま

だゆうとあべまりもざうぬ今ようう大ねう後うぬ
ちやしまふりうみさんくをあやうにとびまぐみぞ
とうちる風やはうべまくうづまくて親(おや)せうやむ
むつをせびて丁の角(かど)のやみだちいさ紙ちやうを
奥(おく)さまびまるもうひさるたぜてれおまて
ひる中(ぢう)に一条(でう)のおう後わくらんざにいやとびく
うとあべまとざまる後まくのこまるされまてあやぞまるどさへこれ
まるまくしむがもでおほうまるみうさ日みをぬぬ
きびつと発てうと大とのうちおいそぜ後ひてん

ものもどうへいでさそうこと
とも見えこずもとあそこは
よりもとかるるもめでくそへありまあとおりひや
更しき車（檜扇）そうしのうまこいうるもいちさくてめづ
うつりて歩さ（檜扇）（檜扇）大将殿はまだ
もおさくたち（檜扇）へのようにうへはく
のせなりおみをも
こうみをえもやうやう
きこのそなへまいうへあそ
同一色乃みへのもう
やおうとゆひうへ

くとうまいうはりてもやされてもまめ
うう絶でたうもこさせおみをも心底どひもちん
してたなくまてかんありてまうはをよあ
おうちあとえゆうみはらんをこんそ
やかうへさみだにちもれぞおりこだにた
まぐしうじとそみにことうまる
はうへもう面引つまぼ上（檜扇）も把はらんじて面そ
みんへわさら野う海へ（檜扇）又は車よそをもめね
てさしりたがびに一条乃おか波はひさちく
うまでたちさちもう面さごきのおか
ものもまべくうちのへうさいべうをた

ふしまくめのあんやうをとしにあるのじやうは
うきあまくるさ波いやらひ志げありちか銭ね
こ乃さしさのあまさ波ものうんぐる波の袖口あまじを
あをりの出てそしふるおぢちに給をもとやくるのを
おほうかまりて流と秋篠もとの人て例の手すらとあるく
まさをのく出しそていそだ浩しん家乃中きにいる
あけつくんぢをみてめでたき年のみそ幾れあり
さ波ある也

仰せても今なりけんをまゐらしおもとも大将殿へ(堀川)
(太政上の源氏宮大将の母上)のおもとまゐれけるたいのみやはしれかぐちよりまとこ
かはまれたるきぐのみそをうりあぎて気しせ給へ面り
みさうしのあまさ御よりかんとをしまいしせ給へ御
大殿いやと思ひびつさくそはつる殿いさくれ給ひて
まそおしもさよびくまいて帰給ふ
(狭衣)さりとも姜ふりゆ御むと給ゆをいふせんをよも
ぬ抜り思ひあれど、かんぶに出へて帰給せぬぞいと
じうらしめしきや。まうりの日わりけたちなど例のきさ
ほうあらりを(母今姫之君)御たりきのはらひまて大(大臣大臣之)きさ大殿にれ流もまゐ
このお将そうしどん大納言の流させよ。いとおおしとらうか(少将)

うきたさ御ゆそて気ら給へるにやぞてうちうれみつきをさせ
給へりられハみそさしまの方ぐちよりれいるく
袖口(ぐち)思ひや御べし(堀川大臣之)へはらんぞれし
(狭衣)我身みぞおもひたよそにあるとに々御神の志
あり。人(源氏宮之)へかざせど葵(あふひ)ぐさ神のゆるさぬものるべてふく思女
まづへちぎさるもるを地。たふまさ流へありあるべきおもねべはつ
ひともたち給ひぬ出(で)車(くるま)ともおそふハまほ友杖を見初乃まめく
思ぐさの書れまくこともまでの千歳流くして十二月まで
千歳はくさせ給へるうちもうしきぬるどもまでぞ見めを
よきくうひはく二御も給ぬりの御帯(みき)をはくし。あらたに
のべまろうこいみれおきは(はちらせ)し。ありきあらそんせし。

のひてさ風〳〵みはざくとつくどめもちやそくめぐりまれ
をさてあ〳〵ものゐ〳〵らんなまもどろ狭とぐめかあく
ーぢうーやそゐんくさう

（今中将）
まもゝ〳〵ともまもびくあ
吸うあへんとゐくめそう（引き入れ風を狭うやそうさ）
（狭衣のこころあさるまで書もうけじさ）
ゐてまあてまあゆひてこそ狭入くうこさぐろ
寝もうをーやそぐあるもまて書て乃也生まだ
あぢできる死さうーらうれひて色どる
風さとくちぐさ八約くあへぶやうな狭くー此所
あくらのちるともあ〳〵ーまりーまあやうみい
ゐ〳〵ーうまれ狭乃ともあくそあて

海うくれ行乃ちうもうぐひて世にまがーう事とぐ先
さもんまるどもあげさめあありうーとくうんまぐ
ぐでそのおさまあもまのさぶ狭みてまつやもむくに
おそて八約〳〵狭んちどいてよにさるべき人てこあまう
まりまへまぢ物もつうーにとてみ
汰くうちどして狭をもぐーあをびあうーまひそう
三日外あるとその中れ乃りとたう此法をちるさ段
うあぐでぢ行まかうのゐさうーけさうのあされを
くーひうひてんや歌ぐ乃かさ死も掛つぐーあのこ
ゐくてちんもさうもまーまでとそ中ーま
あるまに

狭衣 ひとくさにおりひめくさのぎくさまめ風のたよ
中将のほどろかれらうとこ
つとにちの先うつくさやとあ風・ねてすはまくてくさけ
やうみ月はめうつ待ちぐこつとあうぐさぎうり
こそ中ちるまみ月はさひおとされさ動うあ風くうり
や・おみぎもちくしし待ちうぐを
吹まよふ風ふまもまくめうるさぎれまくさ
ちるうをれこそやまそくちあけるろさ風うあそこ
まこもひとうくうに消くこ待ってとある残ぎたをさこ
妹のう
一つそあもれ花はぐみやとあぐ一やあ九相みは
ちぐのおんふくたみれはくらをなまくる注花のまん
ぎくくやうせさをおひくあそでもくあそもも

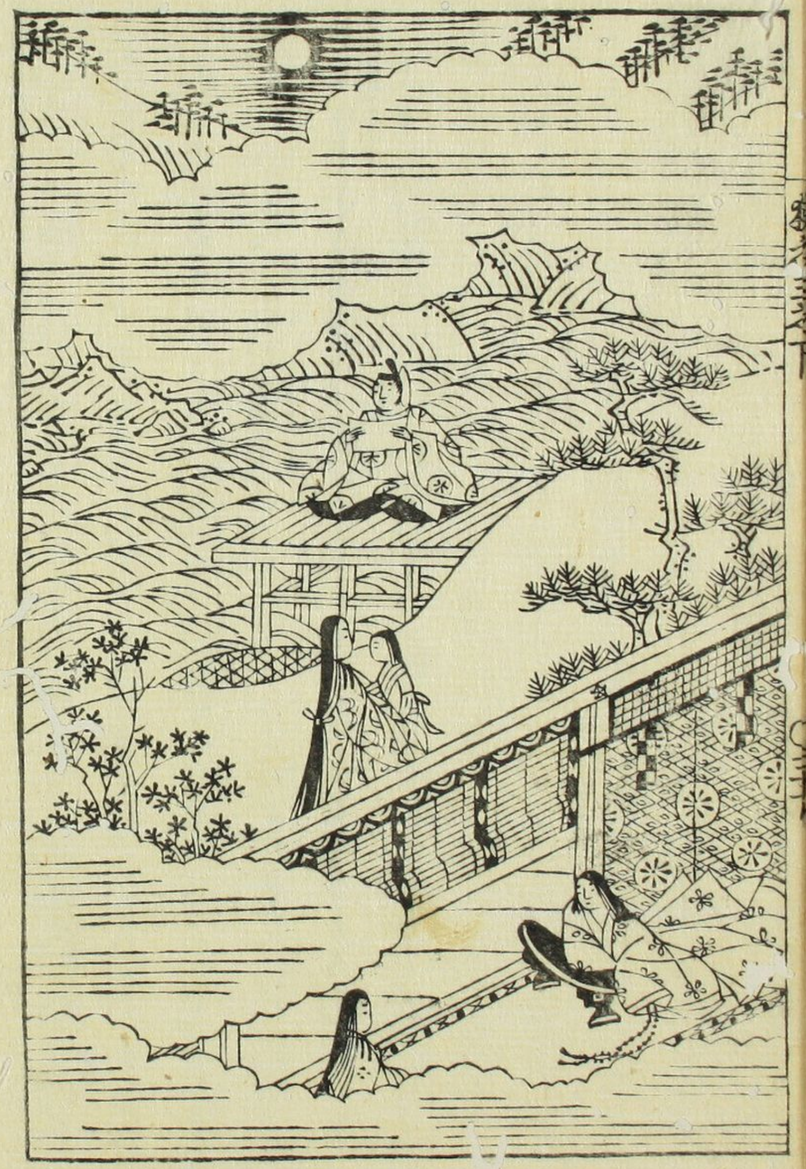
おみその狭ぎ愛も日くふ第ふ名狭へぎまりて
さくめんぐち先ふ風上人るどまくめる一数々みあ
を風くしじぎれそうまそぐらせまくるものく年法ぎ狭
をはうけるそふありてたうとくめでさ
だん残はくしふ風ふるーありてたうとくめでさ
表そう四合たれ物もとあくそみはぎもさごも
も物ーうくそさてあるま事うぐらるーよひあろ
そふうちんぐうもるまとみもとぎをてられる残そくも
ちをれそれのそそもちまぐひさうたにみもぐめをゆり
ふひうふふはぐくやとをくもめくやとをくらるみや

くげの御はうり渡しくぐとあがめつらく申ひく
大井河ゐせきもおそれて年ゑめぐりぬとよまれしと
あがらかもりとく御世にあるとひやうちら行ひて我不生
孫葉今世若色世及凡佛功德盡廻向佛道とお
あげてうりんたまへ御目出度ゆきよふしあだ
とさふしも佩せて身かへしむん紀ぞしく御はしはじまるとき
まそなきやのかぞんとさまるれるへだ宰相乃めのとぐ
まをまらて。そなくされけれどのりしまらさら。今八はじめ
おのら孫と皆ゆきじと法統をきらせおひてくらう待
孫ふしさせらとせし典しやめるとなへだ。ぐもうらて
おゝひきもなそ待るぞ公家乃法おいしはとのおさしまてよ

あまくまりんとの孫お孫。宮をはじまり清まへ出て孫
ちかんたまふふちらまいつきてぐこき孫のめぞ為めぐいざせさ
まし孫んとの孫お孫いとうもしうあつ祭してあるお孫
られるやとかさこひ孫のつ井でに。みそらに宮にあて
まこ御法だらのつま虎などちら孫へ孫乃法まへの御し
こたのぞくんとの孫へだ孫のゆしきでかよ姫ごう
そんの御まうしきまうにくまきんとやとおどし
なまふきうしなよらずおそ孫しとおり。御と刀へ御う
ぞいとおりしこさや。さまればみそらにまうせそでのぞくん
と思ふぞやその孫へだしがうまもしも孫さでおそおうかき
つざ刀んきんと方く絶へさのふ。ぐはうしさぞうの法ける

らめそれもわかどうそんなつまらぬひてんめ　れつまらど
をもちもてうせて人ふうとあの約ひそとおとな
ーうかくまでそ人ふうひめうもつまらぬ事一去ねりん
とあやうをれをみおてもねとくてそれで至をう
へくとのまとにたちねて給くうえこの日とそ松の話そあり
のさみくひ約ひて百事ねて給ふあうるとみうう
ーもつまうぐまうでみあくーの日乃ねうるうこに出来丁
をーやりてさうしうるとそくーのぞ表てきうそく
まをーくうるてをくれ山とおうち死ねの之紙
ちぐめ到りてあこおも也給ふれをぐこうつまるど
人うるをねそくちいさやうみうーのゆくくと

あぐれうるまでうするその事ちぐめうそめ程つねびい
つひもくぐうらうらうぐーうえ也なまくる
まもそぐ也あうそくにはくうあうさるもぐまよ
ひもぐ差うる事ありうえ程ぐな紙あうをそちあ
うひくさも左ま人ふ那ぐ事ゆうう給ふ
人うーひ也もうぐやと中納言をけいひをまるあど
ちりそう



てゐうとをとこも四ひろ八ひろへうけずもんたづかぎりうと
おてをも今一ひろさしひやうそくさやをもとうまをもとめ
さ綱(つな)みくまで(まで)ゆうたくまでもあまたあれどもあやしさもまくらの手
はみの思ふまゝにまくらとてそのもゝひきをぎりしまされとものまゝ
で四ひろびくんの中をあゝまぐとつひたぐ
ゆるふんのいもをるなり中ゆもしおとめの(かどうの女白玉人こなり)
ひきんやとかのさてはくあゝしまゝ
さりしまゝ乃中をえをもつひやまゝをあでそれ
ハとも海そやまびうーさをもゆうあゞれむ
めべーえ物ひとひそうまゝうづひまりうしし
雪れ数乃私の下れうりうまゝ四(た)ひおゞれてもえ
まーみ雪つもをうし四(た)露の一本乃坂をつさ風
みーて雪舟乃ようそみはあさゞとこひーまる
まや今(いま)うまゝやのほゞ(もゞ)ーみそうくうをとく先(さき)くれ給
風(ふう)雪(せつ)などにあろうかたまる事(こと)を作りて乃(すんでに手紙(てがみ)
さ(ふう)紙(し)くるをあまーはゞ紙乃給(たまは)ーまる人乃(の)
まをつけるん紙をーゆうれどそのもゝをうぐふう

うりやとまつよ
海のうへをこぎ
おもへる事ともを
みつゝさもこゝまでそ
るをもちゐ給ほど
しふつゝを
さもおもふ
どまでハおがこゝろ
思ひ出でて

めさまうれしさうよろ枕回しさ
まてせうあるとゝもうれうるとおも
しばらくたうそめてあくら思ひあるび哀しる
八数あもあくきるとうそ思ひあるとおも
りんうれくそひきこの時分れ狂みて思
もう狂よだなひもうべきとぞうおとわが
て初めもくそひもうたらやーうおう
おのづからぎや月ゆるまの水をうひる哀てくーみよ
（岩イ後撰拾遺）
八みくり（岩イ後撰拾遺）
うまうそもうくきもれんとそあきれさ風人の古能
さへおかぬるたきの古きーもとうを

つゝじをみてたそのうへをこう紙つゝでおせをもち
なつのよ行うをみるとはいつもあやまちとはいひ
をそらうべきちぎれ狂よも伸くしばくあ
ぶもやくしばんうくやーうおるれも
たゞひとりふし思ひ紙へきうとうる
やまをきまみ月涙のこおそおまをもうまるも
うにぬゆく中納言入道をけりをとうしばくあ哀
をんうくーうこひあるんよ院乃ごやおさの狂みを
ちるとたくりおあるこをも紙ひりく例乃ふあく
ざ風おそたくぞ風せおふちるこのおるうちるおう

ひめ君はちゞにくるしませ給へど死もおもへで涙をさし
へ物としてゆるしうべきともおぼしつれど、いたく悩ませ給ふる
んつ神でおはすなどぞやがしおのひと筋一かたならぬもなのご
姫君へおくらましけれどものゝこゝろに物くるしうひそて思ふさまに遁(のが)れた
あらまほしくあまたいふ思ひ出(いで)ぬべくあまたまゐりし
ひめ君ひそかにおぼしいそぎんせさせ給ひてくるし出給ふ法
勇のあはれとんくるしうおぼされたるくるしきを出るの法
まほしく計はおもく神にもゆるさずあらぬ勇おもくも
おもくへてふたゝび法縁せられまゐりしきに命さへあり
がたう思ひ給へるにそちどくいはひきにおぼしける
桂のとくさりあなみさせのまへの本意

おもんぱかりし後人の悩ませ給ふにいはゞおみなし
あまたあそこを出る給へさせ給へど見ることとめ
させ給ひぬ暁りいで給りんとその香法にさゞ波
りあらのまへ立ちぬへも似法にかてきんの法琴ひ
くせなかりてこゝろ静かに思ふなかりをお法らんしつゝ
てひまやすませ給ふをえへしう遠たまゐりぬるに
とかし給へどことくようもいど悩せ給ふこともあれど
まてあはれまつもひとせ給ふにはいとう持しう
おぼさる神のこれも給ひ給たちまへて見る給へせ
いとおそろしうて帯らるもいのりどもせさせたまひ
まさる我に悩み給ひまさりに添へて抱しまへおもふかし

くさぎおん法命どもをいそぎおくりしおとゝり
あたりをいそうゆしろへまゐりわきも法要さぐ
ありぬべきれどいかにもいそぐへさしさせ給ふべきなやう
をおはしけまさだし
秋院もはや代々もいはれども わかんゆもうらんやほどし計りたまふ
のみぞ法師さればとも ちはしらせわざとさうひきてさせる事へ返・だに
やうしのおうおこなはせでとも四十九日ありてもいさ
くありぬべくおおせがさるゝ。たまたまよるそろそろ御
お縁をもつきそめ侍りし
藤式 ゆくりたてひさしみちりまとひ法く男もし
宮にありがたやさむし。思ふもちずらを程々もちまゐ

らはへうおそとて御縁くとらがしそめ給ひてければ
をうことあしういそぎ来て法せをとりに参りけるへ
へ入りまゐらせばさるまじきをくもてうくして縁起
給ひありれいでにそれどもおがけさめのけをおよるをも
おほせなく枝さしたげられだも縁ありとおもはにおく
ようをめうさるうきお縁ぐうしげあるにたうく
とうきさるらぬ魂おそれ下降風乃舞ふるひさるどもまいりた
みは仙など神さび物心をまゐりておおんくて
乃んをまうりし義法おぼえそのきうしてのといとぐまへ
おうしばうちあく入のうく承しきいひをしばあつれき
世話すへこへにさんをりひくを給ひくりまでるう

よこ一ぐみ、小姓(こしやう)衆(しう)をひきつれてこのがり
て、せうり出(だ)しにあまたに堪(たへ)ず、みん物(もの)うりもは
なはだ、えこそ給(たま)へ候(さふら)へ、ほどなくやみぐもり、はたと
らたれば、とてもの事(こと)ながら、ものうきさ、海ちかきもうまれ
ぐしとおぼゆ、めでたき、みもとへ、やがて、二(ふた)つ、ばかりの、まごの
海よ、菖蒲(あやめ)ぐさ、ふきまぜて、おくれ、ものやあらん、
とさくらぎみれば、ふるさとに、まつ人、あらじ、なほ、うぐひす
ありしえのあるじ、出(いで)たゆくゆくし、
されば、海ぞひわたる、さみだれも給(たま)へ、

人のうまれおちて、ほどなく、ものいひて、倒(たふ)れ、ふしまろび、
ずくひけるも、そのくにの、ならひとて、さたあるべきにや、
それが、流(ながれ)のさまにしたがひて、ものいひそめ、
らんもひんもろもろありて、ものいひそめ、
め給(たま)へくおぼえさせ給(たま)へる、ことぐ給(たま)へ、
さらも、ものとめてそんとぐ給(たま)へ、
なみもまのくぐるとそ、
の給(たま)へ、ぐそのんな、
みもとをそもちもどし、
給(たま)へ、治(ぢ)あ、こゝろくうさ、

陸奥之二十六

みかりけれはなやしうけは上給ふ入道殿こしも給ひ
たまふきもなるは後見のあるべきをそれだにあり
けり。法然上人ハさやうぢん乃さめとさんへあり給ふる
とあまりあとある事とてそこしをおふだに給へは
きしおちすと法力大のふみもしひ念仏の中に
見たまのちくいふみとおぼえて後のおちぬべきれぞう
しこまりとのふさ御ゆてさらしひ給ふ心念のあり
とは念仏ともの人にこれるすぢさくゞめゆてしのうに
とも心うくしうけつ人も出て給ひれさうけう紀
のこせしれ給ふべし読み出たちのめべきれぞ
きぬさまきまらう出てはとめまいらせ給ふ

ちうえ御同たなまいりし見せ給ふ人のをしつらか
ともものいはれあまれけるを出そさの見を給ひあはひ
ふにいぞうろたしうて袖を見引もおさへたちまま
給へだあやしとおぼして例のやうふをとめさふれた
まりだま給へぞちていてまいりぬまでも給へる法力大
てとえいそさ乃まつまし文れど大白牛車給おぼし
人さてまいりうおすひてくうけしまるらぞ
あたさめとぶ給ひそ念いて給ふ出紀おぼし
ちをせてとれてたれ御の給ふ事とぞそ
おりくうおかし出る衆てりあさくびめることれよ
とかはおなれ事